

に蒙古學の大家ではあるが漢學には達せなかつたからであらう。漢字篆文であるからにはヘニツシユ及びペリオの方が有利である。

ヘニツシユ本は重を漢字音譯に注いでゐる。白鳥本は漢字校訂も嚴密であるが篆文音譯を大旨としてゐる。此點に於ては白鳥本の方が讀者には便利である。漢蒙合璧は云はでもの事であらう。ペリオは校訂に資すべき庫倫鈔本の年代記の類を参照するらしいから注目すべきものであるが、これは出てみなければ分らない。さうすれば現下學界では白鳥本を第一として取て差支なからう。

白鳥博士の音譯法は必ずしも言語學專家の満足を買はないかも知れぬが、一家の嚴密なる音譯法であつて審かに論議する必要もなからう。たゞ不思議に思はれるのは「合罕」と續かない「罕」一字に全部 *Qan* と長母音の符號があることである。*Qan* ではないけない事が分らない。

音譯法は論じないとして、校訂に於ては少しく考へて見たい。葉氏刻本を採用せられた事は、事を始められた時に在つてはさうあるが當然であらう。今ならば四部叢刊本がよい。四部叢刊本は顧廣圻手校本に洪武禦卷を補入したものであつて葉刻本の祖本に外ならない。博士は之によつて稿本を校するに及ばれなかつたらう、が校刊に當られた人はこの勞を取られてもよかつたらうと思はれる。現に凡例に於ては葉本の錯誤は四部叢刊本誤らずと記してある。若し之に依つて校勘されたれば、例へば卷三の十一と二

行の「歌多勒周」の「勒」字に括弧はいらないし、同じく二十八と三行旁注の「合黑察」に「單個」などとしなくて「獨」字を添えられるし、卷八の二十四と三行旁注「整治了」の下、三十六と五行旁注「甚知」の下に並びに「着」の字が補へるなど、面倒な事が大分に省かれたのである。更には又顧跋に葉本「此數舊無撰人」と注したのも改めて明かに年月撰人の名も入れ得るのであつた。醜を得て獨を望みたい。

かゝる校定本には誤植は有り勝ちであるに拘らず其の少い事は校刊者に敬意を表する。例へば卷一の二と五行「阿兀站字羅溫勒」の「溫」字や、續卷二の五十と一行 *Yuridanshe* の *he* を脱し、卷四の四十五と五行八字目の「刺」を「列」に誤る如きが見られるが、何れ正誤表に詳かにせられるだらう。

この定本を得て秘史研究が復た盛んになるを期待する。因に、序では矢張り畏兀兒字原本説であるが、余は内藤先生や服部四郎先生と同じく、少くとも漢字本の原本は八思巴字で、蒙古の秘史の名の附せられた時に改寫されたのだらうと思つてゐる。(石濱純太郎)

支那農村襟記

天野元之助著

三月下旬、流感に襲はれて三四日臥床を餘儀なくされてゐる間に、天野元之助氏の支那農村襟記(生活社刊)を手にしたところ、行文の平明さと、内容の興味深さとに引きづられて、一氣に讀了した。著者は周知のやうに、滿鐵調査部にあつて、多年この方面

の調査研究に従つてみられる人である。

收めるところは、一、支那農村の片影 二、魯省（山東省）觀感
——膠濟鐵路の旅 三、魯省隨想——津浦鐵路の旅 四、江南無錫榮巷鎮）の桑園地帯を視る 五、蘇州の小作制度 六、農村實
驗錄 七、支那農村調査覺書 八、吉林省懷德縣大泉眼農村調査
報告 九、支那の經濟雜誌の九章であり、これらを地域的にみ
れば、中支江南地方から北支・滿洲國へと互つてゐるが、中でも
第四章と第七章・第八章は、もつとも興味深く、第五章も小篇な
がら蘇州地方の小作制度が、はつきりと描かれてゐる。

この書は標記と題するやうに、著者自身による支那農村の實態
調査に關する覺書を集められてあるにすぎなく、それぞれの詳細
なる調査報告書は別に刊行されるであらうが——現にその一部は
滿鐵調査部より出てゐる——それでも、その一つ一つが大なる資
料的價値を有してをり、それによつて啓蒙され、暗示される點が
幾許か知れない。それに文章の平易さは、一般の支那に關心を有
する人人にも、充分な満足を與へるであらう。

一體支那は文字の國といはれ、或は文書の多いことを汗牛充棟
などと誇るやうに、その歴史の研究にあたつても、文獻的資料の
歴大さ、饒多さには、時として腹立しさをさへ感じるほどである。

その上、肝腎なところになると、それらの全てが一様に黙してし
まうことが多く、稀に考古學的遺物によつて、わづかにその幾分
か、補はれる場合もあるといふ有様である。しかし、支那のやう
に變化の少い、發展度の低い社會にあつては、現在における社會

各方面の實態調査といふものが、これら歴史的文獻や古資料に劣
らず高く評價されるべきものであり、かかる實態調査の成果こそ、
今後歴史の研究に従事するものとしても、決して忽せにすることを
ないことを、われわれは本書によつて切實に感ぜさせられるであ
らう。

と同時に、一口に實態調査といつても、これを遂行するには、
なみなみならぬ困難と勞苦、それに加へるに如何に多くの人たち
の協力や、長い歲月に亘る根氣強さを必要とするかを本書は、
はつきりと教へてゐる。（生活社刊、定價參圓（田村實造）

國家と宗教 南原 繁著

國家の問題は、現在の我々にとつて最も大きな關心事の一つで
あり、しかもこれを單なる法的政治的立場からでなくして人間の
内的生命との深い聯關において把へる事によつて、初めて我々
は、國家本質の眞の理解と國家生活の誤りない創造とに到達し得
るのであるが、本書において南原教授が、「凡そ國家の問題は根本
において全文化と内的統一を有する世界觀の問題であり、隨つ
て、究極において宗教的神性の問題と關係なくしては理解し得ら
れぬ」との確信を持つて、國家と宗教との内面的聯關性の在り方
を、古代ギリシヤから現代ナチスに到る迄深い理解を以て辿り來
り、其の史的展開の中から、現代世界における國家の進路に其の
向ふ可き方向を與へんとせられるのは、稍もすれば國家における